Title	古典派経済学の特質
Author	白銀, 久紀
Citation	経済学雑誌. 別冊. 106 巻 1 号
Issue Date	2005-04
ISSN	0451-6281
Type	Learning Material
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学経済学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

基礎科目Ⅱ・経済学説史 （講義資料）

古典派経済学の特質

白　銀　久　紀

経済学の歴史の中で古典派経済学（Classical Political Economy, Classical School）は特殊な位置を占めている。経済学がそこから始まり，経済学が繰り返しそこへ戻っていく，経済学のまさしく原点に古典派経済学は位置している。

古典派経済学はアダム・スミス（1723-90）に始まり，デイヴィド・リカードウ（1772-1823）で完成を見ると考えるのが通例である。しかし，J. S. ミル（1806-73）までを含めて古典学派経済学とみなす見解や，リカードウの対抗者であるロバート・マルサス（1766-1834）を考慮しなければ古典派経済学の全容は理解できないとの見解もある。そこで，とりあえずこの講義では古典派経済学を次のように考えることにしよう。古典派経済学とは，アダム・スミスの『国富論』（1776）によって基礎が固められ，リカードウとマルサスのいわゆる古典的対抗関係によって完成され，J. S. ミルによって解体の予兆が見られる経済学のひとつの思考様式である。

このような古典派経済学という思考様式にはいくつかの特質があるが，本稿では (1) 労働者階級・資本家階級・地主階級からなる３大階級の想定と (2) 労働価値説の２つの特質[1] について，主としてスミスの『国富論』をその素材としながら，簡単に解説することにする。

1) 古典派経済学には，これ以外にも，マルサス人口論・差額地代論・穀物賃金論など特有な思考様式がある。

(1) 労働者階級・資本家階級・地主階級からなる３大階級の想定

古典派経済学では，経済社会を資本家階級・労働者階級・地主階級の３大階級に分けてそれを中心に分析している。「経済学の父」といわれるアダム・スミスは，『国富論』第１篇「労働の生産力における改善の原因と，その生産物が国民のさまざまな階級のあいだに分配される秩序について」において，以下のような章別構成をとっている。

第８章 「労働の賃金について」
第９章 「資本の利潤について」
第11章 「土地の地代について」

このような章別構成は，年々の生産物が労働・資本・土地の所有者である労働者階級・資本家階級・地主階級の３大階級にそれぞれ賃金・利潤・地代という所得として分配されることを示している[2]。３大階級以外の階級は明示的には想定されていない。

さらに，リカードウの『経済学及び課税の原理』（1817）の「序文」では，この点がもっとはっきりと言明されている。

「大地の生産物――つまり労働と機械と資本とを結合して使用することによって，地表からとりだされるすべての物は，社会の三階級

2) この第１篇は所得分配論であると同時に生産物の価格論にもなっている。この点は後述する。ちなみに，第10章の表題は「労働と資本の種々の用途における賃金と利潤について」である。

の間で，すなわち土地の所有者と，その耕作に必要な資材つまり資本の所有者と，その勤労によって土地を耕作する労働者との間で分けられる。」[3]

このような3大階級の想定は，実は当時の（18世紀中葉～19世紀中葉の）現実をそのまま反映したものではない。労働者についていえば，当時工場などで賃金を得て働く労働者階級は現在考えられるよりもその数が少なく，同じ労働者でも家事使用人階級（menial servant class）と呼ばれた人々の数が多かった。スミスが『国富論』の第2篇第3章「資本の蓄積について，すなわち，生産的労働と不生産的労働について」において，労働を生産的労働と不生産的労働とに区別し，工場などで賃金を得て働く労働者の労働を生産的労働，それ以外の「家事使用人の労働」などを不生産的労働と規定したのは，ひとつには上のような事情があったからである。スミスによれば，資本の蓄積をもたらす生産的労働の担い手である労働者階級の労働を維持し，増加させることが諸国民の富を増進させる主たる手段であったが，だからといって労働者階級以外の労働者の存在を無視したり，やがて消滅していくべきだと考えたりしていたのではない。むしろ，家事使用人階級等には地主階級と資本家階級の所得である地代と利潤の一部が手渡され，そのような派生所得によって家事使用人階級等の存在は維持されるものと考えられている。それ故に，スミスにとっては家事使用人階級等をも含めた労働者全体の中に占める生産的労働者の比率が重要な意味を持っていたのである。

このように3大階級の想定は賃金・利潤・地代という3大所得以外の所得を排除するものではないが，利子所得についてはどのように考えられているだろうか。『国富論』の第2篇第4章「利子をとって貸し付けられる資本について」では，資本の使用に対して支払われる価格である利子が論じられている。ここで利子は利潤の一部でもって支払われ，利潤の派生所得であると考えられている。スミスによれば，利子をとって貸し付けられる資本は「貸手が年々の生産物のかなりの量を借手に譲渡することだとみていい。その条件としては，借手が，貸付の継続期間中，これと引換えに年々の生産物の一小部分をいわゆる利子として年々貸手に返済し，そして貸付の終了にあたって，はじめにかれが借用したものに等しい大部分を，いわゆる返済部分として貸手に返済するということである」[4]。

ここでの貸手は，年々の生産物の一部を「借手に譲渡する」ことが可能な所得をもってさえいれば，誰でもよいのであって，資本家でも地主でもかまわない。あるいはその他の階級であってもよい。それでは借手についても，将来に返済可能な所得が得られるのであれば誰でもよい，といっていいだろうか。形式的にはその通りである。しかし，ここでの借手は将来に利子を含めて返済可能な所得を利潤のかたちで得なければならない。言い換えれば，返済すべき利子及び元本は借手の生産する生産物の一部によって支払われるものなのである。利子は，形式的には「年々の生産物」の貸借関係から生じる「貨幣の使用料」と考えられているが，実質的には貸し付けられた資本（stock）を利潤がもたらされるように資本（capital）として使用する資本家の蓄積行動の一環として捉えられている。

地主階級についてはどうであろうか。土地所有については，いわゆる大土地所有が想定されている。すなわち，土地所有者（地主）から地代を払って土地を借りた農業資本家が，農業労働者を雇い，利潤を獲得する目的で農業経営す

3）リカードウ（羽鳥卓也・吉澤芳樹訳）『経済学及び課税の原理』（上）岩波文庫　1987，11ページ。もっとも，リカードウの本書はこの分配比率そのものの解明ではなく，資本蓄積にともなう分配比率の変動の解明を目的としている。

4）アダム・スミス（大河内一男監訳）『国富論』Ⅰ　中公文庫　1978，552ページ。

る。この点はフランス重農学派を代表するフランソワ・ケネー（1694-1774）の経済表における農業の想定と同一である。この大土地所有の想定に限っては当時の，とりわけイングランドの現実に近い想定である。そしてこの地主階級はイングランドでは独特な政治的文化的役割を果たすが，古典派経済学では地代を受け取り，主としてその地代収入によって消費財を購入する存在として考えられている。

自らが所有する土地を自ら耕作するいわゆる自作農などを考慮することはこの地主階級の想定の範囲外であり，自作農などを考慮するためには，イングランドの現実をイングランド以外の現実と比較するまったく別の見地を必要とする。そして，このような新しい見地は古典派経済学の解体を導く一因となる[5]。

このように，古典派経済学における3大階級の想定は当時の現実をたんに反映させたものでも，たんなる所得分配の範疇のために想定されたものでもない。それは古典派経済学がその目的とした諸国民の富の増進・資本蓄積の進行の解明にとって有意義な想定であったと考えられる。

(2)　労働価値説

古典派経済学が理論体系のもっとも基礎においたのは労働価値説であった。スミスによれば，「人々が，財貨を貨幣と交換するか，または財貨を相互に交換するにあたって自然にまもるルール……は，財貨の相対価値または交換価値とよぶべきものを決定する」[6]。この「人々が自然にまもるルール（the rules which men naturally observe）」が労働価値説の内容である。言い換えれば，労働価値説とは「諸商品の交換価値を規制する原理」，あるいは財貨の「交換価値の真の尺度」，「商品の真の価格」[7]を明らかにすることである。スミス自身の解答は以下の通りである。

分業（division of labour）の下では，「一人の人間が自分の労働で充足できるのは，このうちのごく小さい部分にすぎない。かれは，その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならない。つまりかれは，自分が支配できる労働の量，または他人から購買できる労働の量におうじて，富んだり貧しかったりするにちがいない。したがって，およそ商品の価値は，それを所有していても自分では使用または消費しようとせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては，その商品でかれが購買または支配できる他人の労働の量に等しい。それゆえ，労働はすべての商品の交換価値の尺度である」[8]。

「あらゆる物の真の価格，すなわち，どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは，それを獲得するための労苦と骨折り（the toil and trouble）である。……貨幣または財貨で買われる物は，われわれが自分の肉体の労苦によって獲得するものとまったく同じように，労度によって購買されるのである。……労働こそは，すべてのものに対して支払われた最初の対価，本来の購買代金（Labour was the first price, the original purchase-money）であった」[9]。

このように，スミスの考える労働価値説では，まず，ある商品の交換価値はそれで購買または支配できる（それと交換される他の商品の）労働の量に等しい。これは支配労働価値説とよば

5)　J. S. ミル（末永茂喜訳）『経済学原理』（二）岩波文庫　1960，113-275ページでは，分配論の枠組みで，自作農・分益農・入札小作人について考察している。また，ある制度を他の制度と比較する見地はドイツ歴史学派のものであるが，イギリスにおいてもリチャード・ジョーンズのような先駆がある。

6)　アダム・スミス（大河内一男監訳）『国富論』Ⅰ　中公文庫　1978，49ページ。

7)　前掲書，50ページ。

8)　前掲書，52ページ。

9)　前掲書，52，53ページ。

れる。しかしスミスには，労働価値説に関してもうひとつの考え方がある。それは投下労働価値説とよばれる。

「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態のもとにおいては，種々の物の獲得に必要な労働量の比率が，これらの物を相互に交換するためのルールを可能とする唯一の事情であったと思われる」[10]。

ここで想定されている初期未開の社会状態では，(1)で解説した労働者階級・資本家階級・地主階級の3大階級は存在していないので，この投下労働価値説は『国富論』体系の中では，とりわけ経済理論としては，系論・余論と見なされて重要視されないこともあるが，スミス以後，リカードウが投下労働価値説を積極的に展開したこともあるので注意を要する。また，この初期未開の社会状態においては，投下労働と支配労働は一致している。

スミスによれば，初期未開の社会から文明化された社会になるやいなや，すなわち，まず資本蓄積がなされるやいなや，資本家と労働者が生まれ，次いで土地が私有化されるやいなや，地主が生まれる。こうして商品の交換価値の尺度を定めるには，資本家の利潤と労働者の賃金，さらには地主の地代を考慮しなければならなくなる。ある商品の交換価値は，労働の全生産物が労働者に帰属する初期未開の社会では生産物を生産する労働（投下労働）の量によって定まるが，資本蓄積と土地私有化がなされた後の文明化社会では，その労働量（これは支配労働量に等しかった）が，賃金と利潤と地代に分化していくので，交換価値も賃金と利潤と地代の合計によって定まることになる[11]。

このような価値の賃金・利潤・地代への分解は，また価値の賃金・利潤・地代によって価値が構成されるという考え方に転換される。スミスの自然価格（natural price）がそれである。賃金の自然率と利潤の自然率・地代の自然率によって構成される（3者を合計したもの）が自然価格である。ここでの自然率は次のようなものである。

「およそ一つの社会，一つの地域には，……賃金ならびに利潤についての通常率または平均率というものがある。……同じように，地代の通常率または平均率というべきものがある。……これらの通常率または平均率は，ふつうそれが相場になっている時と所での，賃金，利潤，地代の自然率とよぶことができる」[12]。

また，自然価格は次のようなものである。

「ある商品の価格が，それを産出し調整し市場に運ぶのに用いられた（employed in raising, preparing, and bringing it to market）土地の地代，労働の賃金，資本の利潤を，それらの自然率にしたがって支払うのにちょうど過不足のない場合には，その商品は，自然価格ともいうべき価格で売られているのである。」[13]

この自然価格は「相当の期間にわたってひきつづき売ってゆける最低の価格」であるとともに，「いわば中心価格であって，そこに向けてすべての商品の（市場）価格がたえずひきつけられるものなのである」[14]。この意味で，自然価格は再生産を保障する価格であるといえる。

---

10) 前掲書，80ページ。有名な「2頭の鹿と1匹のビーヴァーの交換」の例はこの文脈に現れる。「一方の1時間分の労働生産物（鹿）が他方の2時間分の労働生産物（ビーヴァー）と交換され」，その数量の比率が2：1となっている。

11) スミスは交換価値の「第4の部分として」↗固定資本の補填を一応考えているが，この第4の部分も賃金と利潤と地代の3つの部分へと還元できると考えた。前掲書，86ページ参照。

12) 前掲書，94ページ。

13) 前掲書，94-95ページ。

14) 前掲書，95ページ，99ページ。スミスは自然価格を支払う意志のある人たちの需要を有効需要（the effectual demand）と呼んでいる。

スミス以降の労働価値説の展開は，やや図式的にいえば，スミス理論のうちにあった支配労働価値説と投下労働価値説の２面性が，投下労働価値説を徹底させて文明化社会（資本主義社会）の分析をしたリカードウと，支配労働価値説を継承して同じく文明化社会（資本主義社会）の分析をしたマルサスとの２方向に展開された。リカードウとマルサスはそれぞれの労働価値説にもとづいて文明化社会（資本主義社会）を分析したが，その理論的帰結は対立・対抗するもの（古典派的対抗関係）であった。しかし，この関係は，古典派経済学における資本蓄積論に属する問題なので，別途考えなければならない。